



日本福祉大学国際学部
総合演習(千頭クラス)

2030年を目標として世界中が取り組んでいるSDGs(持続可能な開発目標)。17のゴールのうち、異文化理解を基礎とした多文化共生に関わるゴールはいろいろあります。

たとえば、ゴール1(貧困)、ゴール3(健康福祉)、ゴール4(教育)、ゴール5(ジェンダー)、ゴール8(働きがい)、ゴール10(平等)、ゴール11(まちづくり)、ゴール16(公正)、ゴール17(パートナーシップ)などです。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



はじめに

この冊子は、日本福祉大学国際学部に学ぶ学生が、国籍やルーツの違いを互いに楽しみながら、多文化を理解し合い、共生できるように、身近に体験してきたことを、物語風にまとめたものです。

多文化共生という言葉を聞くと、とても大変で難しいことに聞こえるかもしれませんが、まずは、身の回りで、学生が日々感じていることを、ざっと垣間見てはどうでしょうか。

あなたのまわりにも、実は多様なルーツを持った人が、毎日、同じように暮らし、でも同時に、互いの違いにちょっとびっくりしたり、驚かされたりしています。

そんな気づきに想いを馳せてみませんか。

千頭 聡

目次

1. コミュニケーション

お互いに信頼しすぎるタイ人

 チャイ

ある日 街の中

 チャイ

「ありがとう」ってどんなときに言う

 しおん

時間に正確な人たちとマイペースな人たち

 りおの

距離を縮めるもの:韓国でのコミュニケーション体験

 かいし

日本語で最も分かりやすい表現

 タオ

コミュニケーションの違い-ネパールと日本-

 サムジャナ

あいさつから始まる異文化を楽しもう

 チャン

インドネシアと日本のあいさつ

 デワ

うれしさを表わす態度の温度差

 ちせい

忘れていた笑顔のあいさつ

 ゆうと

2. 学校と日常生活

授業中の静けさと元気な声

 りおの

5分を感じ方が違う!?

 しおん

3. 食文化

インドネシアと日本の食事

 デワ

ベトナムと日本の食事

 トウ

ネパールと日本の食文化

 ビノド

ズルズルとラーメン食べるなんて

 オー

はし使い-食文化の違い

 ライ

日本とインドの文化や習慣

 かいし

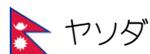
4. 家族・人間関係

ネパールと日本の家族の関係



5. 仕事・サービス

日本人のていねいさと謝る文化



日本のサービス文化



販売サービスやレストランのサービス



働きすぎの日本人とおしゃべり好きのインドネシア人



日本とベトナムの文化

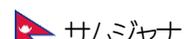


セルフレジ



6. マナー・公共の場での行動

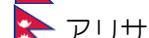
ネパールと日本のマナー



電車の中の冒険



静寂の重さと温かさ:通勤電車で感じたこと



ご近所文化-静かな日本とにぎやかなインドネシア

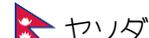


裸の文化-プールでの衝撃的な体験

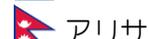


7. カルチャーショック

自分の時間と家族との時間

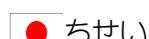


私にとって日本は薄くなかった



8. おどろき

廃棄自転車はもらえるの？



お互いに信頼しすぎるタイ人

タイ人は日常生活にとって「楽しく生きること」と「気にしない」が当たり前。

だから、タイ人は「知っている人」を信じるが、日本は「きちんとした手続き」や「組織」を信じる社会。



つまり、お互いの距離は、日本よりタイはずっと近い！
タイ人の「信頼」は人間関係への温かさと同観性に基づく。

これは上座部仏教の影響でもある。

だから、タイ人は裏切られや失敗しても、「運が悪かった」「しょうがないんだ」「前世に悪いことしたから」で済みます。

逆に言うと、日本はお互いをあまり信頼しない社会。

人と人の距離はタイより結構離れている！

今の日本では、人を簡単には信じない！

「人間関係」・「知り合い」・「親戚」ということよりも契約・時間・約束を守ることで人を信頼！

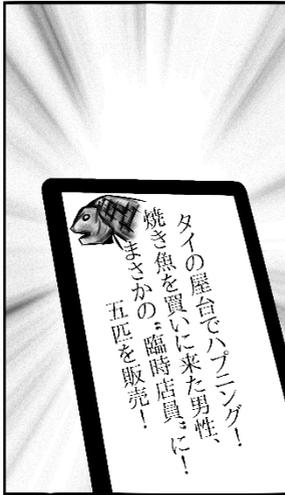
★ 簡単に言うと、

タイ人の信頼:心(spiritual trust)に基づく！

日本人の信頼:行動(behavioral trust)に基づく！

ある日 街の中

ある日 街の中



「ありがとう」って、どんなときに言う？

登場人物

 ケイト：アメリカ出身の留学生

 リン：中国出身の留学生

 ゆい：日本出身



しおん

放課後、ゆいは教室を歩いていました。
そのとき、うっかりケイトのイスに
カバンが当たってしまいました。

ゆい：「ごめんね！」

ケイト：「えっ？全然大丈夫だよ！」と笑って答えました。

少しして、ケイトが落としたペンを、ゆいが拾ってあげま
した。

「ありがとう！」

二人は笑い合いました。

そこへ、中国にルーツを持つリンがやってきて、

リン：「なに話してるの？」

ケイト：「ゆいが “ごめんね” って言ったんだよ、ちょっと
ぶつかっただけなのに！」

リンもびっくり。

リン：「日本の人はよくごめんねって言うね。中国では、そんなときは、気にしないでって言うだけかな。」

ゆい：「日本ではごめんねって言うと、相手に対して気を使ってるよって伝えられる感じなんだ。」

リン：「中国ではね、仲のいい人には、ありがとうもあまり言わないよ。言うと、なんだかよそよそしい感じがする。」

ケイト：「おもしろいね！日本はたくさん言うやさしさ、リンの国は言わなくてもわかるやさしさなんだね。」

国が違ってもしっかりしていることは同じです。みんな相手を大切にしたい気持ちから生まれています。



時間に正確な人たちとマイペースな人たち

一限から授業がある日、日本人学生はいつも早めに教室にいます。

授業開始の15分前には、すでに何人かが座っていて、スマートフォンを見たり、友達とはなしたりしています。



りおの

私もその一人。「早く来ておくと安心」という気持ちになります。

人が少ない教室で静かに準備している時間が、ちょっとしたルーティンのようになっています。

一方、留学生たちは授業開始の少し前、あるいは授業開始時間ピッタリにやってきます。

明るく笑いながら席につき、慌てた様子もありません。

ときにはチャイムの後にゾロゾロと入ってきて席に着く。

その自然さに、ついこちらも笑ってしまいます。

日本人学生が「遅れたらどうしよう」と心配するのは、まったく違う感覚です

文化の違いと言ってしまえばそれまでだけど、時間のとらえ方には、それぞれの「心の余裕」みたいなものがあるのかもしれない。

きっちりしているのも悪くないけれど、もう少し肩の力を抜いてもいいのかも。

そんなふうに思いながら、今日も私は開始 15 分前に教室へ向かっています。



距離を縮めるもの:韓国でコミュニケーション体験

ある日、日本生まれの韓国人の叔母と僕は、韓国旅行に出かけました。

空港を出ると、叔母は懐かしそうに街を見渡し、「まずは、昔から通っている飲食店に行こう」と微笑みました。



かいし

叔母と僕は釜山の賑やかな路地を歩き、小さな食堂に入りました。

店内には笑い声が響き、店員さんは元気に話しかけてきます。

注文の際、叔母は店員に「今日は少し辛さを控えめにしてもらえますか？」と韓国語で頼みました。

すると店員は笑いながら「辛くないとおいしくないですよ！」と明るく答えます。

そのやり取りをあとから叔母に聞いて、僕は驚きました。

日本では店員にこんなふうに冗談を交わすことはあまりないからです。

日本では控えめに相手の気持ちを思いやり、意見をはっきり言わない人が多いのに対し、韓国では感情を素直に表現し、率直な会話を楽しむのが自然なのだと。

この経験から、僕は「文化が違って、人と人の距離を縮める気持ちは同じなんだな」と、思いました。



日本語で最も分かりやすい表現

日本では、自分の意見を伝えるとき、正しい文法で話すだけでなく、話す場所や時間、相手によって言い方を変える必要があります。

だから、はっきり言うことや直接的な言い方は、日本の文化ではあまり良くない場合があります。



タオ

私はいつも、日本人と話すときは、難しい文法よりもできるだけシンプルでわかりやすい言い方を探そうにしています。態度やしぐさも、自分の気持ちを伝えるためにとても大切です。

たとえば、式典やイベントなどのフォーマルな場では、きちんとした服装をして、言葉遣いにも気をつけて、場に対する敬意を表す必要があります。

逆に、リラックスした場では、話し方も少しカジュアルになりますが、明るい態度で、自分の言い方に気をつけないと誤解を生むこともあります。

また、何かをもらったとき、日本人は「ありがとう」と言うよりも「すみません」と言うことがよくあります。

「ありがとう」「すみません」「失礼します」「申し訳ありません」などの言葉は、日常の会話でとてもよく使われます。

これらの言葉は、相手の今の気持ちや状況に配慮して話すことを表しています。

そして、日本の子どもと話すときは、大人と話すときとは少し違う話し方になります。必ずしも丁寧な言い方ではなくても、子どもに「間違っていない」と伝わるように話すことが大切です。なぜなら、子どもは大人の話し方をまねして学ぶからです。

だから、自分の考えをわかりやすく伝えたり、「何が正しいか」を教えたりする必要があります。子どもに話すときは、長くてわかりにくい話し方を避けて、丁寧で親しみやすい言葉を使うようにします。ぶっきらぼうな言い方や、語彙が少ない話し方は避けたほうがいいです。

私は、日本の子どもとの会話も、観察して学ぶべき大切なコミュニケーションのひとつだと思っています。

コミュニケーションの違いーネパールと日本

私はネパール出身です。

日本に来てから、ネパールと日本のコミュニケーションのしかたが大きくちがうことに気づきました。どちらの国も人と人とのつながりを大切にしますが、その表し方がちがいます。



サムジャナ

まず、話し方のちがいです。

ネパールでは、家族や友だち、先生にもわりとフレンドリーに話します。たとえば、先生に対しても笑いながら話したり、冗談を言ったりすることがあります。

しかし日本では、先生や目上の人に話すときは、ていねいな言葉を使わなければなりません。「です」「ます」を使い、あいさつや「よろしくお願いします」「おつかれさまです」などの言葉がとても大事です。最初はむずかしかったですが、今は少しずつ慣れてきました。

次に、表情やジェスチャーの使い方も違います。

ネパールでは、話すときに手をよく動かしたり、大きな声で笑ったりします。

でも日本では、静かに話す人が多いです。

日本人は自分の気持ちを強く出さないことが多く、「空気を読む」ことが大切だと思いました。相手の気持ちを考えて話すことが、日本のマナーの一つだと感じます。

また、ネパールでは人との距離が近く、すぐに友だちのように話します。

しかし日本では、最初は少し距離をおいて、ゆっくり関係を作ります。これは日本の「相手を尊重する文化」からきていると思います。

このように、ネパールと日本のコミュニケーションには多くのちがひがあります。

でも、どちらにもよいところがあります。

私は日本のていねいさを学びながら、ネパールの明るさも大切にして、両方の国のよさを生かしていきたいと思います。



あいさつから始まる異文化を楽しもう

私は日本に来てから、多くの文化の違いを体験しました。



チャン

最初に感じたのは、あいさつの仕方の違いです。

ベトナムでは、会ったときに、笑顔で「こんにちは」や「元気？」と言いますが、日本ではお辞儀をしてあいさつをします。

最初は少しぎこちなくて恥ずかしかったですが、今では自然にできるようになりました。

お辞儀には「相手を大切にする心」が表れていると知り、日本の文化の深さを感じました。



また、食文化にも多くの発見がありました。

日本では、食事の前に「いただきます」、終わった後に「ごちそうさまでした」と言います。

ベトナムではそのような言葉はあまり言いませんが、この習慣を知ってから、食べ物や作ってくれた人への感謝の気持ちを持つようになりました。

さらに、日本の料理は見た目も美しく、季節を感じられるところがとてもすてきです。

異文化の中で生活することは、最初は大変でしたが、今ではその違いを学ぶことが楽しくなりました。

文化の違いを通して、自分の世界も広がり、相手をもっと理解できるようになったと思います。

これからも、異文化の中で新しい発見を楽しんでいきたいです。



インドネシアと日本のあいさつ

インドネシアと日本では、あいさつの仕方
や使う言葉、そして気持ちの表し方に違い
があります。



デワ

まず、日本ではあいさつがとても大切にさ
れています。

朝は「おはようございます」、昼は「こんにちは」、夜は
「こんばんは」と、時間によって言葉が変わります。

また、人に会ったときや別れるときだけでなく、会社や学校
でも毎日のようにあいさつをします。

たとえば、先生や上司に会ったら、軽く
おじぎをしてあいさつをします。おじぎ
は日本文化の特徴であり、相手への敬意
や感謝の気持ちを表します。



一方、インドネシアでは、あいさつの言葉が宗教や地域によって少しちがいます。

たとえば、インドネシアではイスラム教徒が多いので、「Assalamu' alaikum (アッサラーム・アライクム)」というあいさつをよく使います。

これは「あなたに平和がありますように」という意味で、返事は「Wa' alaikum salam (ワアライクム・サラーム)」と言います。

また、時間によって「Selamat pagi (おはよう)」「Selamat siang (こんにちは)」「Selamat malam (こんばんは)」などの言葉も使われます。

インドネシアでは笑顔で握手をすることが多く、親しみを大切にしています。

日本では、上下関係や相手との距離を意識したあいさつが多いのに対し、インドネシアではもっとフレンドリーでカジュアルなあいさつが多いです。

たとえば、友だち同士なら「Hai!」「Apa kabar? (元気?)」と声をかけ、気軽に会話が始まります。

日本では、あいさつの場面でも丁寧さが求められますが、インドネシアでは温かさや親しさが重視されます。

また、日本のあいさつでは沈黙や間合いも大切にされます。

たとえば、相手の話を静かに聞いたり、あいづちを打ったりすることで礼儀を示します。

インドネシアでは、話すときにジェスチャーや表情をたくさん使う人が多く、より感情豊かにコミュニケーションをとります。



このように、インドネシアと日本のあいさつには多くの違いがありますが、共通していることもあります。

それは、どちらの国でも「あいさつ」は人と人との関係をよくするために欠かせないということです。

言葉や動作はちがっても、相手を思いやる気持ちは同じです。

おたがいの文化を理解し、尊重することが国際交流の第一歩だと思います。



うれしさを表す態度の温度差

あれは中学の頃のことでした。

ある日、いつものようにテストが返却されました。



ちせい

私は答案用紙を受け取り、赤ペンで書かれた「100」という数字を見た瞬間、初めての満点だったため、心の中で小さく拳を握りました。

けれど、周りに浮かれた様子を見せるのが少し気恥ずかしくて、つい無表情のまま答案を机に伏せました。

すると、隣の席にいる、明るくて感情豊かなフィリピン人の友達が、私の答案をちらりと見て目を丸くし、「えっ、100点？すごい！！　なんで喜ばない？」と勢いよく背中を叩きまして。

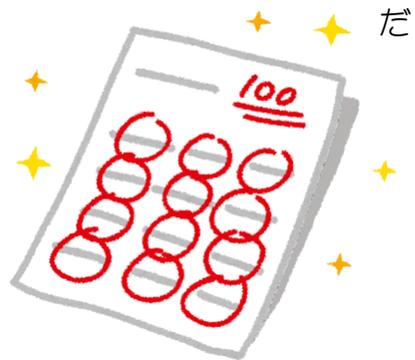
その笑顔は太陽みたいにまぶしくて、私よりも本気で喜んでいるようでした。

温度差をとてもそこで感じましたが、思わず照れくさくなって、ようやく口元が緩み、その瞬間、心の中にじんわりと温かいものが広がりました。

自分の喜びを誰かと分かち合うって、こんなに嬉しいことなんだと気づきました。

私は未だにフィリピン人の彼ほどは表立って喜びを出せませんが、それでも、あの日から私は、何かいいことがあったとき、少しだけでも素直に笑うようにしています。

彼の明るさが、私の中にも少しだけ灯った気がしました。



忘れていた笑顔のあいさつ

フィールドワークの一環で、マレーシアの小さな村を訪れたときのことを今でもよく覚えています。



ゆうと

昼下がりの強い日差しの中、のんびりと村の中を歩いていると、通りすがりの人たちが、笑顔で遠くから手を振ってくれたりしました。

初めて会う人たちなのに、まるで昔から知っている人のように温かく迎えてくれて、とても嬉しい気持ちになりました。

村の人たちは、誰に対しても自然にあいさつをしていて、それがその土地のあたたかい空気を作っているように感じました。

でも、日本では知らない人にあいさつをすることはほとんどありません。

授業中の静けさと元気な声

授業中に先生が「どう思いますか？」と質問すると、日本人学生の中に静かな時間が流れはじめます。

誰かがペンを回し始め、誰かはノートに目を落とす。

みんな心の中で「当てられませんように」と願っているようだ。



りおの

私もその一人で、意見があっても、つい言葉を飲み込んでしまう。

「間違えたらどうしよう、変に思われなかな。」そんなことを考えているうちに、次の話題に進んでしまう。

その一方で、留学生たちはすぐに手を挙げる。

「私はこう思います」「自分の国では～」と、はっきりした声が教室に響く。

その瞬間、静かだった空気が少し明るくなる。

内容よりも、「発言してみよう」という気持ちの強さに、いつも感心してしまう。

日本人学生が空気を読むのが得意なら、留学生たちは空気を変えるのが上手なのかもしれない。

行事のときも同じで、日本人は「どうしようかな」と迷っている間に、留学生がもう申し込んでいる。

その積極さを見ると、なんだか楽しそうで、自分も少し動いてみたくなる。

最近は授業で指名されても、以前ほど緊張しなくなった。声に出してみると、案外なんとかなるものだ。

静かな教室の中にも、少しずつ自分の声が混ざるのがうれしい。



5 分の感じ方が違う！？

登場人物

 ケイト：アメリカ出身の留学生

 リン：中国出身の留学生

 ゆい：日本出身



しおん

日曜日の朝。

ゆい、ケイト、リンの3人は、駅前で10時に待ち合わせをしました。

ゆいは9時50分に着いていました。

ゆい：「よし、ちょっと早いけど、もうすぐみんな来るかな!」

10時になっても、誰も来ません。

10時5分にケイトがやっと走ってきました。

ケイト：「ゆい、ごめん！ちょっと遅れちゃった〜!」

ゆい：「ううん、大丈夫！でも、もう10時過ぎたよ?」

ケイト：「えっ、ほんの5分じゃない?」

ケイトは笑って肩をすくめました。

10時15分。リンがゆっくり歩いてやってきました。

リン：「ごめん、電車がすこし遅れたの。」

ゆい：「15分も!?!」

ゆいがびっくりすると、リンは、にこっと笑いました。

リン：「まだ朝だし、みんなに会えたからうれしいよ。」

3人でカフェに入りながら話しはじめました。

ゆい：「日本では、時間をぴったり守るのが大事なんだよ。5分でも遅れると迷惑をかけたって思うの。」

ケイト：「アメリカではね、5~10分くらいならちょっと遅れたくらいかな。話してる時間を楽しむ方が大事なんだ。」

リン：「中国でもそんな感じ。少し遅れても気にしないでって言葉があるんだよ。」

ゆい：「なるほどね。時間を守るのも、のんびりするのも、どっちも相手を大切にすることなんだね!」

3人は「うん!」と声をそろえて笑いました。

時間を守る国も、のんびりな国も、どちらも「相手を大切にしたい」という気持ちから生まれています。時間よりも人とのつながりを大切にするなど、違いを知ると世界の色々な優しさが見えてきます。



インドネシアと日本の食事

インドネシアと日本では、食事のマナーや食文化にいくつかの大きな違いがあります。

まず、食べるときに使う道具がちがいます。



日本では、ほとんどの人がはしを使いますが、インドネシアではスプーンとフォークを使うのが一般的です。

インドネシアでは、右手でスプーン、左手でフォークを持ち、スプーンで食べ物を口に運びます。

また、田舎の地域では、右手だけで手づかみで食べることもあります。左手は不浄とされているため、使いません。

次に、食事のときの音や態度にも違いがあります。

日本では、ラーメンやそばを食べるときに音を立ててするのは自然なこととされています。

それは「おいしい」という気持ちを表す方法でもあります。

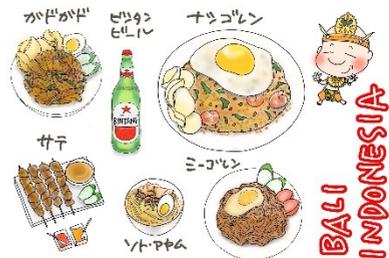
しかし、インドネシアでは食べるときに大きな音を出すことはあまり良いマナーではありません。

静かに食べることが礼儀とされています。

さらに、食事のスタイルにも大きな違いがあります。

日本では一人ひとりに自分のお皿やおわんがあり、料理が分けられています。インドネシアでは多くの場合、大皿に料理を並べて家族や友人とシェアします。

特に家庭や田舎では、テーブルを使わず、みんなで床に座って食べることもよくあります。



みんなでわいわい話しながら食べることで、家族や友人との絆を深めることができます。

また、食事の前後のあいさつも異なります。

日本では食べる前に「いただきます」、食べ終わったら「ごちそうさまでした」と言います。

一方、インドネシアでは「Selamat makan（スラマツ・マカン）」と言って「楽しい食事を」という意味を表します。

食べ終わった後は「Terima kasih（ありがとう）」や「Enak sekali（とてもおいしかった）」などを言います。

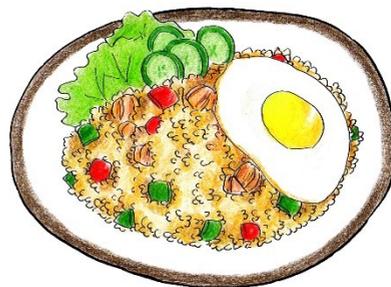
さらに、宗教による違いもあります。

インドネシアはイスラム教の国なので、豚肉を食べない人が多く、食べ物が「ハラール（Halal）」であることが大切です。

日本ではそのような制限は少ないですが、最近はハラール対応のレストランも増えています。

このように、インドネシアと日本の食事のマナーには多くの違いがありますが、どちらにも「感謝」と「思いやり」の気持ちが共通しています。

お互いの文化を理解し、尊重することが大切だと思います。



ベトナムと日本の食事

ベトナムと日本の食文化を比べてみると、
たくさんの違いがあります。



トゥ

まず、食べる場所が少し違います。

ベトナムでは、朝ご飯を外で食べる人が多く、フォーやバイ
ンミーなどを屋台で買って食べます。

でも、日本では多くの方が家でご飯とみそ汁を食べます。
次に、味の好みも違います。

ベトナムの料理はハーブやナンプラーを使って、少し甘くて
すっぱい味が多いけど、日本の料理はしょうゆやみそを使
い、うま味を大切にしています。

たとえば、ベトナムのスープは香りが強いですが、日本のスープ（みそ汁）はやさしい味です。

ベトナムでは一年中暑いので、新鮮な野菜やハーブをたくさん使います。

日本では季節によって食べるものが変わり、春はたけのこ、秋はさんま、冬はなべ料理など、「季節の味」を楽しむことができます。

これは日本の食文化のすばらしいところだと思います。

また、食べ方も違います。ベトナムでは家族や友達と一緒に大皿の料理を分けて食べることが多いですが、日本では一人一人のお皿があります。



ネパールと日本の食文化

日本に来てから、私は食文化の違いにとっても驚きました。

ネパールと日本では、食べ方だけでなく、食事に対する考え方も大きく違います。



ネパールでは、家族みんながそろって食事をするのが大切です。

ごはんの時間は、家族の絆を深める時間でもあります。

手で食べることも多く、そのぬくもりの中に愛情を感じます。

ネパールには「**खानाले मान्छे जोडिन्छ**（食べ物人がつなぐ）」という言葉があるように、食事は、心と心をつなぐ大切な文化です。

一方、日本では、忙しい毎日の中で家族がそろって食べる
ことが少ないようです。

でも、日本人は食事のマナーや季節の料理をととても大切に
しています。

お正月のおせち料理や花見のお弁当など、食を通して季節を
感じる文化もあります。

静かに「いただきます」「ごちそうさま」と言う姿には、食べ
物や作った人への感謝の気持ちが表れていると感じます。

ネパールの家庭的で温かい食卓と、日本の礼儀と美意識のあ
る食文化、どちらもとても素晴らしいと思います。

国が違って、食を通して「人と人がつながる」という思
いは同じです。

私は、二つの文化の良さを学びな
がら、感謝して食事を楽しみたい
と思っています



ズルズルとラーメン食べるなんて

日本に来たばかりの頃のことです。

最初のうちは外食よりも、家で料理を作って
食べるが多かったです。



オー

ですが、日本に来て1か月ほど経ったある
日、友だちと家の近くのラーメン屋に行きました。

そのとき、日本人のお客さんがスープを飲むときに「ずるず
る」と音を立てて飲んでいるのを見て、びっくりしました。

私の国、ミャンマーでは、ズルズルと音を立てて麺を食べる
なんて、とても出来ません。

もう一つ印象に残っているのは、日本で初めてレストランで
アルバイトをしたときのことです。

仕事が終わって、みんなと一緒に「まかない」を食べたのですが、日本人の同僚たちが箸を使ってとても速くご飯を食べているのを見て驚きました。

私と友だちも頑張って速く食べてみましたが、なかなかうまくいかず、時間がかかってしまいました。

それは日本に来たばかりのころの話です。

今では日本の文化にも慣れて、私もラーメンやうどんを食べるときに「ずるずる」と音を立てて食べられるし、箸でご飯を速く食べられるようになりました。

「郷に入れば、郷に従うべし」。そんな日本のことわざを思い出します。



はし使い-食文化の違い

私はネパールから日本に留学して、食文化の違いに驚くことがたくさんあります。

ネパールでは、家族と一緒にご飯やカレー、野菜を「ダルバート」というお皿で食べます。



ライ

ご飯を手で丸めて食べるのが普通で、指先で食べる感覚が楽しく、家族と一緒ににぎやかに食事をする時間がとても大切です。

手で食べることで、料理の温かさや香りを直接感じられるのも魅力です。

一方、日本では箸を使って食べます。

最初は手で食べられないことに少し迷いましたが、箸の使い方や食事のマナーを学ぶうちに、日本の食文化の美しさに気づきました。

特に、ご飯に箸をささないことや、麺類以外はできるだけ音を立てないようにするのが良いマナーなど、細かいルールが大切にされているのです。

料理は小さな器にきれいに盛り付けられ、見た目や食べ方も大切にされています。

また、日本では一人で食べる人も多いですが、その時間を静かに楽しむ文化もあると知りました。

食べ方や味は違ってても、食事を通して人を思いやる気持ちはどの国でも同じだと感じます。

私はネパールの手で食べる文化と、日本の箸やマナーを守る文化、両方の良さを大切にしていきたいです。



日本とインドの文化や習慣

日本に住む高校生のさくらは、夏休みにインドの友人アミタの家に招かれました。

夕食の時間になると、テーブルには色とりどりのカレーやナンが並んでいました。



かいし

さくらは持ってきた箸を取り出そうとしたが、アミタは笑顔で「インドでは手で食べるのよ」と教えてくれました。

さくらは少し戸惑いながらも右手でナンをちぎり、カレーをすくって食べてみました。

すると、温かさや香りが指先から伝わり、料理の味がより豊かに感じられました。

「手で食べるとね、食べ物とのつながりを感じるの」とアミタが言いました。

日本では、箸を使ってきれいに食べることが礼儀であり、食事中に音を立てないことが大切にされています。

しかしインドでは、手で食べることが自然であり、食べ物を「命」として感謝する気持ちが込められています。

食べ方は違って、どちらの文化にも「食を大切にする心」があることを、さくらはその晩の食卓で深く感じたのでした。



ネパールと日本の家族の関係

日本で生活するようになってから、私は日本の家族の関係がネパールと大きく違うことに気づきました。



ビノド

ネパールでは、家族はとても強い絆で結ばれています。

三世代が同じ家に住み、お互いに助け合いながら生活するのが普通だ。祖父母が子どもたちに昔話を語り、家族全員で笑いながら夕食を食べる光景は、どの家にも見られます。

ネパールには「**परिवार भनेको जीवनको आधार हो** (家族は人生の土台である)」という言葉があるように、家族は生きる力の源です。

でも、日本では、若い人が高校や大学を卒業すると、すぐに独立して一人暮らしを始めることが多いです。

家族同士の関係は温かいとおもいますが、個人の自由と自立をととても大切にしていると感じます。

最初のころは「どうして家族と離れて暮らすのだろう」と不思議に思いましたが、今ではそれが「お互いを尊重する」形なのだと理解できるようになりました。

ネパールの家族の温かさと、日本の自立を重んじる文化。どちらにも学ぶべき点があると思います。

家族の形は違って、「相手を思いやる心」は同じだ。私は、この二つの文化の良いところを大切にしていきたいと考えています。



日本人の丁寧さと謝る文化。

日本では、どんな時でも丁寧さがはっきり見えます。

ある日コンビニで、デザートとパンのお金を払わずに持って行ったお客さんがいて、警察まで呼ばれました。



ヤソダ

でも店員さんは、あの泥棒にずっと「すみません、すみません」と謝っていました。

「えっ！？なんで店員さんが謝るの！？」と思いました。

ネパールだったらきっと大きなケンカになるか犯罪した人はもうパンチされてしまう。。

また、バイト先の店長もいつも、どんなことにも謝ることにしています。コーヒーをこぼしたお客さんにまで「すみません」と言っていて、私は「あなたのせいじゃないよ！」と、心の中でツッコミました。

そして一番びっくりしたのは、友だちと時計を買いに行った時です。

お金を払ったのに、なかなか商品を渡してくれなくて、「あれ？忘れたのかな？」と思いました。

でも店員さんはドアまで歩いてきて、深くお辞儀しながら手渡してくれたんです。

しかも外に出てから後ろを見たら、まだお辞儀していました！そんな経験日本に来る前全然なかった。

良い経験でもあり、ちょっと恥ずかしい経験でもありました。

でも気づいたら私も、「すみません」と言いまくって電話でもお辞儀するようにすっかり日本スタイルになっています。

やっぱり日本はマナーを学ぶには最高の国だと思います。

お客さんだけでなく、みんなが他人のプライバシーや迷惑を気にして行動しています。

時々「そこまで気にしなくてもいいのに」と思うけど、本当にいい学びです。

マナーのない人は世界中にいるけど、日本ではとても少ないと思います。

ネパールはそうだし他の国にも日本ぐらいの丁寧さを感じないと思います。



日本のサービス文化

日本は、世界でもトップレベルの接客サービスがある国だと言われています。

言葉づかいが丁寧でやさしく、いつもお客様の気持ちを大切にしています。

教育の中でも、どんな場面でも礼儀正しくすることが教えられています。



タオ

礼儀は、日本文化の中でもとても大切なものです。

毎日のあいさつや、話し方、メールの書き方にも、あいさつの言葉やへりくだった表現が使われます。

たとえば「ご連絡ありがとうございます」「よろしくお願ひいたします」「お疲れさまでした」などです。

年下が年上に話すときも、年上が年下に話すときも、言葉の中にお互いへの尊敬が感じられます。

だから、日本人は海外の人と会うときにもよく尊敬されます。

また、日本人は人との距離をうまく保つのが得意です。

はっきり断ることはあまりせず、相手が自然に気づいて引くような言い方をします。

「お互いに気持ちよく過ごすこと」を大切にされていて、協力するときも、どちらにもメリットがあるように考えます。

これは、私が日本人の性格の中でとても好きなのところです。

でも、どこにでも、そうでない人もいます。

日本人が海外の人から尊敬されることが多いからこそ、外国人を差別する人もいます。

たとえば、外国人に冷たい態度をとったり、わざと無視したりすることがあります。

コンビニで働く外国人スタッフが、「日本語がわからないなら国へ帰れ」と言われるようなケースもあります。

日本で外国人として生活するのは、簡単ではありません。

それでも、年下や自分にとって得にならない人にも、変わらず丁寧に接してくれる日本人もいます。

そういう人たちに出会えたことを、私はとてもありがたく思っています。



販売サービスやレストランのサービス

ベトナムと日本の販売サービスやレストランのサービスには多くの違いがあります。

まず、日本では「おもてなし」の精神がとても大切にされています。店員さんはいつも笑顔で「いらっしゃいませ」と元気に挨拶し、お客さんが気持ちよく買い物や食事ができるように工夫しています。例えば、コンビニやスーパーでも、店員が丁寧に袋詰めをしてくれたり、レシートを両手で渡したりする姿を見ることができます。これは日本の文化として根付いている「丁寧さ」と「思いやり」の表れだと思います。



トゥ

一方、ベトナムでは、店員さんとの会話がもう少しカジュアルでフレンドリーです。特に市場や小さな店では、値段交渉をしたり、店員と雑談をしたりすることもよくあります。日本では値段が決まっているため、交渉することはありません。その代わりに、商品やサービスの質で信頼を得ることが大切にされています。ベトナムでは人とのつながりを重視する文化が強く、店員とお客さんの距離が近いと感じます。

レストランのサービスについても違いがあります。

日本では、料理を運ぶときやお皿を下げる時も静かに丁寧に行われます。また、水やおしぼりのサービスも無料で提供されることが多いです。店員さんはお客さんに気づかれないように、さりげなくサービスをするのが上手です。

反対に、ベトナムではもう少しアットホームな雰囲気があり、店員さんと話をしたり、冗談を言ったりすることもあります。そのため、ベトナムのレストランは日本よりもにぎやかで、親しみやすい雰囲気があります。

このように、日本とベトナムではサービスの形が違いますが、どちらにも良いところがあります。日本のサービスはとても丁寧で安心感がありますが、少し距離を感じることもあります。ベトナムのサービスは温かく、家族のような親しさを感じることができます。どちらの国のサービスも、お客さんを大切にする気持ちは同じだと思います。これからも両方の良い点を学びながら、自分の国でもより良いサービスを作っていきたいです。



働きすぎの日本人とおしゃべり好きのインドネシア人

日本とインドネシアの「働き方」と「コミュニティ文化」には、面白い違いがたくさんあります。



ズルファ

日本では、仕事を最優先にする人が多く、残業や休日出勤も当たり前のように行われます。

まるで会社が「第二の家」のようで、上司と過ごす時間のほうが家族より長い人もいます。

一方、インドネシアでは「仕事は大事だけど、家族や友達はもっと大事」という考えが強く、仕事が終わればすぐにみんなで集まっておしゃべりしたり、ご飯を食べたりします。

時間に少しルーズなところもありますが、その分心にゆとりがあります。

また、地域との関わり方にも大きな違いがあります。

日本では、プライバシーを大切にしている、近所の人とはあいさつを交わす程度の距離を保つことが多いです。

しかし、インドネシアでは、近所の人にはほぼ「親戚レベル」で、ちょっとしたことでも「手伝うよ！」と声をかけてくれます。お祭りやイベントになると、誰かの家に自然と人が集まってきて、笑い声が絶えません。

日本では静かにお花見、インドネシアでは音楽と笑いでにぎやかに。

どちらも素敵ですが、その違いがとてもユニークで、暮らしてみても思わず笑ってしまう瞬間が多いです。



日本とベトナムの文化

日本とベトナムは、ともにアジアの国であり、地理的にもそれほど離れていませんが、文化や生活の面では多くの違いがあります。



チャン

まず日本人は時間にとっても厳しく、約束の時間に遅れないように頑張ります。

電車やバスもほとんど遅れず、社会全体が時間を守ることを大切にしています。

一方、ベトナムでは時間についてももう少し寛容で、人とのつながりや雰囲気重視する傾向があります。

そのため、少し遅れても笑顔で癒されることが多いです。

また日本では秩序を守ることがとても重要です。

列にならぶ、ゴミを分別する、社会のルールがよく守られています。

ベトナムでは、人々が明るくフレンドリーで、コミュニケーションを通じて助けあう文化が強いです。



日本がルールを守る社会とすれば、ベトナムは人と人のきずなを大切にする社会と言えるでしょう。

さらに、仕事の考え方にも違いがあります。

日本では多くの方が会社のために長時間働き、責任感を持って努力します。

ベトナムでは家族と時間や個人の生活を重視する人が多く、仕事と生活のバランスを取ることを大切にしています。

このように、日本とベトナムには様々な違いがありますが、どちらにも良い点があります。

日本からは責任感と秩序を学び、ベトナムからは人間らしい温かい文化を理解し合うことで、より良い関係を気づくことができると思います

セルフレジ

少し昔の話なのですが、僕がアルバイトをしていたコンビニにセルフレジができました。



ゆうと

お客さんが自分でお金を入れて会計する新しい機械です。

とても便利だけど、ニュースでは「海外ではセルフレジをやめる国もある」と聞いた。

万引きが多いからだそうだ。

僕は少しびっくりした。

コンビニで働いていると色々な外国人の方が来店してくれる。

しかし、みんな礼儀正しくそのようなイメージがなかったからだ。

だからこそ海外ではそのようなことが多いことに驚いた。

その日もいつものように接客をしていると、ひとりの若い外国人の方が走ってきた。

「これ忘れてた」

そう言って、小銭を手渡してきた。

僕は笑って「ありがとうございます」と言った。心があたたかくなった。

どんなに機械が仕事を楽にしてくれていてもこういう心はなくならないでほしいと思った。

やっぱり人を信じるって大事な、と僕は思いました。



ネパールと日本のマナー

ネパールと日本では、マナーのちがいがたくさんあります。

マナーとは、人と話すときや生活の中での「れいぎ」や「きまり」のことです。

国がちがうと、マナーもかわります。私は日本で生活をして、ネパールとのちがいをよく感じました。



サムジャナ

まず、あいさつのマナーがちがいます。

ネパールでは、両手をあわせて「ナマステ」と言います。

日本では、おじぎをして「おはようございます」「こんにちは」などと言います。

日本では、あいさつの時に体の動きも大切だと思いました。

次に、食事のマナーもちがいます。

ネパールでは右手で食べる人が多いです。

日本でははしを使って食べます。

そして、食べる前に「いただきます」、食べたあとに「ごちそうさまでした」と言います。

最初はこれを言うのをわすれて、少しはずかしかったです。

また、時間のマナーも大きくちがいます。

ネパールでは、約束の時間に少しおくれても大きな問題になりません。

でも日本では、時間をまもることがとても大切です。私はアルバイトをしていて、5分早く行くように気をつけています。

最後に、話すマナーもちがいます。

ネパールではフレンドリーに話す人が多いですが、日本では静かに話します。

そして、人の話をさいごまで聞くことが大切です。

このように、ネパールと日本のマナーはちがいます。

でも、どちらの国のマナーも大切です。おたがいの文化を知ることで、もっとよい関係を作ることができると思います。



電車の中の冒険

私はネパールから日本に留学して、初めて電車に乗った日のことを今でも覚えています。

ネパールではバスやタクシーで移動することが多く、時間もあまり正確ではありません。



ライ

電車に乗るというだけでワクワクしましたが、切符の買い方や改札のルールは全くわかりませんでした。

駅に着くと、まず自動券売機に驚きました。

「どうやって切符を買うの？」と隣の人を見ながら試してみました。

やっと買えたと思ったら、改札の前で切符を落としてしまい、あたふたしているうちに後ろに人が並びました。

「すみません、すみません！」と何度も言いながら、なんとか改札を通過しました。

次は、電車に乗った瞬間、私はまた驚きました。

ネパールではバスが混んでいても押し合いながら乗っていますが、日本の電車はみんなが静かに座ったり立ったりしています。

スマホを見たり本を読んだり、誰も話さず、まるで図書館の中にいるようでした。

私は笑いをがまんしながら、静かに立っている自分が面白くてたまりませんでした。

駅を降りると、エスカレーターでは「右に立つ」「左を空ける」ルールもあり、最初はスムーズに出来なかったです。

でも、少しずつ日本の電車のルールに慣れると、きちんとしたルールの中でも楽しめることに気づきました。

ネパールではありえないような静けさや順序だったけれど、それも日本らしい魅力だと思いました。

あの日以来、電車に乗るたびに、「今日はどんな冒険が待っているのだろう」とワクワクするようになりました。



静寂の重さと温かさ：日本の通勤電車で感じたこと

ネパールのカトマンズで生まれ育った私にとって、「乗り物」とは五感の全てで感じるものだった。



アリサ

バスは常に人で溢れ、座席の下には野菜や荷物が積まれ、ドライバーの流す音楽がエンジン音と人々の会話と混ざり合い、一つの大きな生命の鼓動となる。

隣に座る人が誰であろうと、すぐに「どこへ行くの?」「ご家族は?」と話しかけるのが普通だった。

そこには、物理的な近さだけでなく、精神的な近さがあった。

バスは移動するコミュニティであり、誰もが互いに監視し合



うのではなく、支え合う温かい場所だった。

私が初めて日本の電車に乗ったのは、新しい職場へ向かう通勤の道だった。

そこで遭遇した静寂は、あまりにも重く、私に文化的な衝撃を与えた。

電車は滑らかに走っているのに、車内は深海の底のように静まり返っていた。

皆、自分の世界に没頭していた。熱心に本を読み、スマートフォンを見つめ、漫画を読み、新聞を広げている。

この深い集中は暗黙の了解によって守られているようだった。

誰も電話に出ない。誰も大きな声を出さない。

会話をしている人はごく稀で、仮に話していても、その声はほとんど聞き取れないほどのか細い囁きのようだった。

この沈黙は、破ってはいけ
ない神聖なルールのように
感じられ、私は思わず口
を開きかけたが、すぐに
閉じた。



最初は、この静けさを「冷たい」と感じた。

ネパールのバスで感じたような、皮膚のすぐそばにある体温や安心感が、ここにはなかったからだ。

「皆、なぜこれほどまでに孤立しているのだろうか」と、一瞬、心が凍るような寂しさを覚えた。

しかし、数ヶ月が経ち、日本の暮らしに慣れるにつれて、この静寂が持つ別の意味を知った。

ある日、仕事で疲れた私が電車で揺られていると、いつの間にか眠ってしまっていた。

目が覚めた時、自分の肩にもたれかかられた人がいないことに安堵した。

また、急な仕事の連絡に対応する際、誰もがヘッドホンを装着したり、口元を覆うように小声で話したりしている姿を見て、この沈黙は「個人の時間と空間を尊重し合うための、無言の約束」なのだと気づいた。

日本の静寂は、ネパールのような「共同体の温かさ」とは違った形の「思いやり」だったのだ。

ここでは、隣の人と会話をしなくても、その人の休息やプライバシーを守ることで、最大限の敬意と愛情を示している。

賑やかな喧騒の中で繋がりをを感じるネパールと、徹底した静寂の中で互いを思いやる日本。

どちらの文化も、人への愛情の形が違うだけで、根底にあるのは「他者を大切に作る心」に変わりはない。

この静寂の重さを知った時、私は初めて、日本の優しさの本当の輪郭を感じることができたのだった。



ご近所文化-静かな日本とにぎやかなインドネシア

地域との関わり方や人付き合いにおいても、日本とインドネシアでは大きな違いがあります。



日本では、プライバシーを重視し、近所の人とはほどよい距離を保ちながら生活しています。

朝や夕方に「こんにちは」「お疲れさまです」とあいさつを交わす程度で、深く関わることはあまりありません。夜は静かに過ごし、周りに迷惑をかけないように気をつけるのが基本です。

秩序やルールを守る意識が強く、静けさの中にも安心感があります。ただ、少し寂しいと感じることもあるかもしれません。

一方、インドネシアでは「人と人の距離」がとても近く、近所の人ほとんど家族のような存在です。

困っている人がいれば自然に助け合う「ゴトンロヨン（助け合い）」の精神が今も生きています。

たとえば、誰かが家を建てるときには、近所の人が集まって手伝い、終わったあとにみんなでご飯を食べながら笑い合うのが当たり前です。

お祭りや結婚式のときには、地域全体がひとつになって準備を進め、子どもからお年寄りまでが笑顔で参加します。さらに、食べ物をシェアする文化も魅力的です。

新しい料理を作れば、「これ食べてみて！」とおすそ分けするのが日常です。

時には「もう食べた？まだでしょ、食べなきゃダメ！」と半ば強制的に勧められることも（笑）。

断れないけど、そんな温かさが心地いいのです。

日本の静けさとインドネシアのにぎやかさ、どちらにもそれぞれの良さがあります。

日本では落ち着いた空間で安心して暮らせ、インドネシアでは人のつながりの中に生きる温もりを感じます。

文化の違いは、ときに驚きを生むけれど、その中に笑顔や学びがたくさん隠れています。

互いの良さを理解し合い、静けさとにぎやかさのバランスをとることができたら、きっともっと豊かで幸せな社会になるでしょう。

文化の違いは壁ではなく、世界を広げるチャンスなのです。



裸の文化-プールでの衝撃的な体験

ある日、私と友だちは「暇だなあ」、そうだ、「日本のプールにまだ行ったことがないから、一緒に行こう」と話しました。



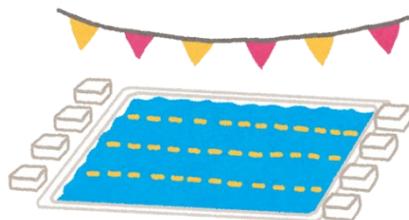
そこで、水泳パンツやゴーグルなど、必要なものを買ってプールに行きました。

オー

公共のプールなので、きっとお客さんが多いと想像していましたが、驚いたことは「あれ、プールが浅い!」

私の国インドネシアでは、水が深くて広いプールが多く、自由に泳げます。

でも、日本のプールは浅いのです。泳ぐときに守らなければならないルールもあって、少し困りました。今でもまだ慣れません。



さらに衝撃的なことが。

更衣室でシャワーを浴びて着替えようとしたとき、まわりを見ると、なんと日本人はみんな裸になって着替えているのです。本当に見てびっくりしました。

確かに周りは男の人だけでした。でも、私の国ミャンマーでは、公共の場所で着替えるときはタオルなどを巻いて着替えます。同性であっても、人前で裸になるのは、とても恥ずかしい気持ちになります。

プールから帰って、インターネットで調べたり、他の人に話を聞いたりして、日本ではそれが当たり前のことだと分かりました。

これこそが、文化の違い、裸の文化の違いなのだと気が付きました。今は、少し慣れてきたような感じがします。



自分の時間と家族との時間

ある日、バイト先で19歳の日本人の同僚が言いました。

「来月から一人暮らしするんだ！楽しみ～！」

私はびっくりして、「えっ？寂しくないの？」と聞き返しました。



ヤソダ

すると彼は笑って、「やっと自由になれる！」と言いました。

お正月しか家族に会えないか、家族に会うため予約すると言ったことが何人からも聞いてショックで変な顔になってしまうこと何回もあります。

ネパールでは、19歳で一人暮らしをする人はほとんどいません。いつも家族と一緒にです。

家族とご飯を食べたり、夜一緒におしゃべりしたりするのが普通です。

私にとって、家族は友だちのような存在で、なんでも話せる相手です。だから、日本で家族との距離が遠いを見ると、少し寂しい気持ちになります。

今、私も家族と離れて暮らしていますが、やっぱり毎日会いたいです。常に「早く会いたい」と思っています。

日本の「自分の時間を大切にできる文化」は素敵だけど、私の国では「家族を一番にする」ことが大切と教えられています。

もちろん自分の夢も大事ですが、私たちを育ててくれた人たちと過ごす時間は、人生で一番貴重だという考えをみんな持っています。

生きている間に、家族との時間を大切にしたいです。国と育つ環境によって家族との関わり方が違うことをは実感しました。



私にとっての日本は薄くなかった

中部国際空港セントレアの到着ロビーは、カトマンズのトリブバン空港とは別世界の静けさだった。



アリサ

蒸し暑い、けれどどこか秩序だった空気。バッグをガラガラと引きながら、私は名古屋の街へ向かう電車に揺られた。

私の舌と心は、まだネパール時間の中で生きていた。

故郷では、道の片隅で売られるタカリ・セットの強烈なスパイス、一口食べれば汗が噴き出すモモの熱気が、日常そのものだった。

あのダル・バート（豆スープとご飯）のずっしりとした重みが、私にとっての「食事」の定義だった。

日本に来てすぐ、ホームステイ先の台所で、ホストマザーが差し出してくれたのが、あの四角い箱だった。

「はい、これが日本の『お弁当』よ。初めてでしょう？」

それが私と日本の味の、記念すべき最初の出会いだった。

箱を開けると、そこには色が鮮やかで、几帳面に仕切られた世界が広がっていた。

鮭の切り身、緑のブロッコリー、そして卵焼き。

一口目の衝撃は、味覚の「欠落」だった。

ネパール料理に慣れた私の舌は、まず「辛さがない」ことに戸惑った。あの脳を痺れさせるような唐辛子の刺激がない。

そして、全体的に味が「薄い」。鮭は塩気があるものの、周りの野菜はほとんど味付けされていないように感じた。

「あのこれ、ソースとか、スパイスはかけないんですか？」

ホストマザーは笑って首を振った。

「これはこのままで美味しいのよ。素材の味を大切にするの」

素材の味？私にとっての素材の味とは、スパイスで炒めて初めて引き出されるものだった。

このお弁当（bento）は、まるで音量をゼロに絞られた音楽のようだった。



静かで、上品で、そして何より「物足りない」。

初日の夜は、そのお弁当を半分も食べられなかった。

お腹は空いているのに、身体が受け付けない。

一口食べるたびに、心のどこかでカトマンズの道のスパイスの香りを求めてしまう。

バイト先のコンビニでも、休憩時間になると皆が美味しそうにお弁当を温め、味噌汁をすすっていた。

彼らの笑顔を見るたびに、私だけが違う文化のテーブルに座っているような孤独を感じた。

「なぜ、こんなに味が薄いのに満足できるのだろうか？」

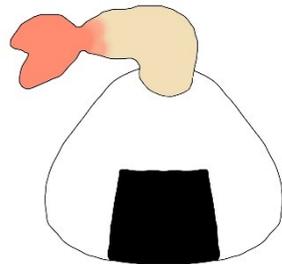
それが当時の私の、日本に対する最大の疑問だった。

しかし、名古屋で暮らし始めて三週間が経った頃。

ある日、コンビニで買った『天むす』を口にした。

エビの天ぷらを握り込んだ、名古屋名物のおにぎりだ。

その日もいつものように食欲がなかった。



けれど、一口かじった瞬間、今まで気づかなかった感覚が生まれた。

海苔の磯の香りと、ほんのり甘じょっぱいたれ、そして、握り飯の中心にある「衣のサクサク感と海老のプリプリ感」

「おいしい」

自然と口から出た。

それは、辛さや強いスパイスでごまかされていない、素材と調理のシンプルさが生み出す、初めての「心地よい味」だった。

そのとき、私は悟った。

日本の味は「薄い」のではない。「繊細」なのだと。

あの四角いお弁当（bento）の静かな世界は、喧騒の中で生きるネパールの食とは対極にある、もう一つの「豊かさ」だったのだ。

その日、初めてお弁当を最後まで食べた。

そして、初めて、名古屋の空気が「無臭」ではなく、「出汁の匂い」に満ちているように感じられたのだった。

廃棄自転車はもらえるの？

私は市営住宅に住んでいます。

毎年、市営住宅の組長はみんなに、不要な自転車などがあれば、廃棄するために、出すようにお願いします。



ちせい

ある年、私の家に組長の順番が回ってきました。

そこで、パンクした自転車や要らないと言われた自転車などに廃棄の印をつけていました。

そのとき後ろから、「その自転車捨てるなんてもったいないよ、私に一つちょうだい」といきなり声を掛けられ、少しびっくりしました。

私はしばらくその場で固まってしまったのですが、後ろを振り向くと、同じ市営住宅に住んでいる中国人の方がそこに立っていました。

そして、その人は自転車を指差し、「これとかまだ使えるよ、使える！」と言ってきました。

私は思わず笑ってしまいました。

たしかに、その人が指差した自転車は全然見えそうだし、捨てるのはもったいないなと感じます。

でも私は、この人のように、廃棄される自転車を欲しいと思っても「ちょうだい」と言えません...

しっかりと自分の意見を言える、あるいは主張できるというのは、やはり文化の違いかなと感じました。

因みに、その廃棄予定だった自転車はもともとの持ち主に相談し、中国の方に譲られる形となりました。

2年以上経った今でも、あの中国の方が同じ自転車を使っているのを見かけ、そのたびに微笑ましくなります。



